

# レッシングの『ミス・サラ・サンプソン』について

——解放された女性——

清 水 純 夫

## 1

啓蒙主義の作家レッシングの戯曲『ミス・サラ・サンプソン』の初稿は『5幕の市民悲劇 (Ein bürgerliches Trauerspiel in fünf Aufzügen)』という副題の下に1755年に完成され、その初演は大成功を収めた。この作品はイギリスを舞台にした市民悲劇であるが、しかし市民悲劇とはいつでも決して市民階級が主人公となっているわけではない。サラの父親はサー・ウィリアム・サンプソンという名前が示しているようにサーという称号をもった貴族であるし、サラの恋人メルフォントと彼のかつての愛人マーウッドも貴族である。ただしいずれも宮廷で活躍する裕福な名門の貴族ではない。物語も貴族の犠牲になる市民階級の悲劇といったものではなく、単に貴族階級の家庭という小世界の中での私的な出来事に他ならない。このような意味で市民 (bürgerlich) ということばは使われているのである。だがこのような使い方は適切ではないと思ったのか、レッシングは1772年の第2版の時点で市民悲劇の市民という規定を削除して、単に『5幕の悲劇 (Ein Trauerspiel in fünf Aufzügen)』と改めた。これは本作品における概念規定の曖昧さを示す1つの事例であると言えよう。そして作品の弱点でもある。しかし本作品の曖昧さはこれだけに止まらない。その他に、より問題を孕んだ弱点と思われるものがさらに3つ存在する。しかしその列举に先立って後の分析に必要な範囲でまず筋を紹介しておかなければならない。

メルフォントは愛人マーウッドと長らく同棲し、子供まで儲けた。しかし彼は田舎貴族サー・ウィリアム・サンプソンの一人娘サラと恋仲になり、彼女と駆け落ちし、田舎の安宿に滞在してすでに2ヵ月半が過ぎようとしている。だが彼はサラの切なる願いにもかかわらず彼女との結婚に踏み切れず、遺産問題を盾に結婚を引き延ばしている。その宿へマーウッドと、彼女から連絡を受けたサラの父親が到着する。マーウッドは手練手管の限りを尽くし、その上子供までも出しに使ってメルフォントを再び取り戻そうとするがうまくいかず、メルフォントの烈しい非難の言葉に激昂して、思わず彼を短剣で刺そうとして失敗する。身を引くことを条件にサラとの面会を彼に認めさせたマーウッドは、彼の親戚の人間と偽ってサラに会い、サラに彼と別れて父親の許へ帰るように説得するが、サラから父親の許しが得られたと聞かされて逆上し、自分の正体を明

かし、サラが気を失っている間に気付け薬を毒薬とすり替えて逃走する。毒が回り死が避けられないと悟ったサラはメルフォントにマーウッドを赦すように、そして父親にはメルフォントを息子として受け入れ、さらに彼の子供をも引き取るように言い残して死ぬ。だがサラの最後の願いも空しく、自責の念からメルフォントは自害して果てる。

以上が作品の粗筋である。さて、作品の3つの弱点であるが、第1はK. EiblやO. Mannに代表される、筋に統一がみられないとする説である。「この作品が＜筋の一致＞を守っているということは疑わしくなった。マーウッドの陰謀はすでに第3幕で挫折するし、彼女から連絡を受けた父親は誘惑者を赦す。サラの死は第4幕の結末でのマーウッドの突然の思いつきの結果である。(……) 第1のサー・ウィリアムの筋と第2のマーウッドの筋がここでは結合されている」<sup>(1)</sup>。「償うことのできない悲劇的な罪の代わりに償いうる過失。それゆえ破局は内的必然性をもって起こるのではない。侮辱された恋敵の、復讐の念に燃える嫉妬という全く無関係なモチーフが無理矢理、機械仕掛けの神として導入される」<sup>(2)</sup>。しかし2人の研究者の主張にもかかわらず本当に統一がみられず分裂しているのかという疑問がわく。

第2はM. DurzakやW. Barnerの主張するサラの成長の件である。「これまでほとんど注目されてこなかったが決定的なことはレッシングがキリスト教徒としての態度を決して女主人公の性格の前提条件としているのではなく、いかにサラがドグマとなっているキリスト教徒の浅薄な美德の理想よりも彼女の内面的な体験の方が真実だと見直すに到るかを、まさに作品の筋の展開の中で具体的に描いていることである」<sup>(3)</sup>。「サラは作品の開始の時点で完全に徳に適った性格の持ち主として描かれているのではなく、作品の経過とともにその性格の成長を体験するのである」<sup>(4)</sup>。サラの部分的な成長は確かに認められるが、しかし全体としてみた場合、果たしてそれが本当に成長といえるのかどうか。成長についてのこの曖昧さが第2の弱点である。

第3はマーウッドの捉え方である。悪徳の権化、稀代の悪女、という従来の全面否定的な彼女の評価に対して、最近になって肯定的な評価が現れてきた。たとえば、「マーウッドは決して奸策家ではない。彼女は男のために、そしてまた子供のために闘う女性であり、新たなメディアを自称する」<sup>(5)</sup>とするO. Mannの見解や、「マーウッドは気が狂っているようにみえる時でも真実を語っている。(……) 社会によって彼女に割り当てられた女の運命に対する彼女の抵抗が初めて彼女の＜前市民階級的＞な、英雄的な性格を、そしてメディアとの親近性を宣言する。」<sup>(6)</sup>とするR.-P. Janzの見解などがそれにあたる。マーウッドについて正反対の評価を作品が許容する曖昧さが第3の弱点である。

しかしこれらの曖昧さは果たして本当に曖昧なものなのか否か、弱点であるのか否か。むしろ弱点と捉える研究者は作品の現象面に囚われすぎているために真価を見落としているだけで作品としては首尾一貫しているのではないか、とも考えられる。それゆえ、以上の3点についての検証が本論文の目的である。

## 2

先にも述べたようにサラの父親はサーの称号をもつ貴族であるが、決して高位の宮廷貴族でもなければ裕福な貴族でもない。サーの称号をもつ貴族は準貴族とナイトでナイトはジェントリに属すが<sup>(7)</sup>、彼がサラたちの滞在している宿へ連れてくる召使はたった1人であるし、マーウッドはサラのことを「あの美しい田舎娘」(第2幕第3場)といっていることなどから彼はジェントリで下級の田舎貴族だと考えられる。しかしいくら身分が低くても貴族であることには違いはなく、その小家族の中で父親は家父長制的な厳しい父親として君臨している。義理があったからメルフォントに家への出入りを許したことが彼とサラを親しくさせる結果となったが、彼はメルフォントと娘の結婚を認めようとはしない。彼は結婚相手は父親が決めるという家父長制的な父親の典型なのである。サラは父親をとるかメルフォントをとるか悩んだ末に父親を捨ててメルフォントと駆け落ちする。父親の頑なな態度が結局、娘を駆け落ちに追い込んだのである。当然のことながら父親は駆け落ちした2人を許そうとはしない。このことがサラの心に重くのしかかる。

しかしもとはといえばサラは父親の許しが得られないからやむなく駆け落ちしたのであって、その点ではサラには父親が夫を決めるという家父長制的秩序よりは自分の愛情と希望の方を優先するという、家父長制に対する反抗の姿勢が認められる。夫を自分で選ぶという点で主体的で自立的な女性、すなわち進歩的な女性という側面をサラはもっているのである。しかしその一方で、家庭を破壊し、老いた愛する父親を捨てたという、秩序と道義に反する行為をした意識がサラの心を苦しめる。サラの気持ちはこの2つの間を揺れ動く。

さらにサラは駆け落ちして2ヵ月半が過ぎた今でもまだ未婚のままである。未婚のままの同棲は愛人関係と何ら変わらず、美德を重んじる彼女にとってそれは徳に反するふしだらな行為を意味する。「結婚の絆がなければどんなに誠実な愛といえども不浄な欲情のままです」(第4幕第8場)。このような行為は神に対する罪であり、結婚しない限りこの罪は消えないとサラは考える。だから彼女はメルフォントに強く結婚を迫る。「私は心情的にはあなたのものです。永遠に。けれども秩序をほんのわずかでも逸脱する者を罰をもって威嚇してきた裁き手である神の目の前ではまだあなたのものではありません」(第1幕第7場)。「あなたが望まないのなら私をあなたの妻であると公表しなくてもかまいません。好きなように公表してかまいません。あなたの姓を名乗るつもりもありません。その方がよいと思うのなら私たちの結婚は秘密にしてください。良心の安らぎを得ること以外の他の利益をそこから引き出そうなどということがもし私の心に浮かぶようでしたら私は永久に結婚に値しない女であってもかまいません」(第1幕第7場)。

結婚を世間に公表しなくてもよいし、妻と呼ばれなくてもよいが、とにかく結婚だけはしたいというサラのこの訴えは、神に許されさえすれば世間や名誉を無視しえる強さを彼女がもっていることを示している。サラは世間からは一定程度自立しているのである。しかし外面的なことにはこだわらないかわりにそれだけサラにとっては神との内面的な関わりは絶対的な重みをもつ。

結婚による神の許しがサラには絶対に必要なのである。このようにサラは神と、そしてメルフォントに依存している点で完全には自立していないのである。これがサラの保守的で、否定的に評価されるべき側面である。本来であればサラはメルフォントにすがるばかりで何もせず、徒に毎日を無為に過ごすのではなく、世の中に出て有意義な社会活動による貢献などで罪の償いをするべきであったろう。そうすればサラは精神的・経済的にも自立を果たして神依存、メルフォント依存から脱却することも可能であったかもしれない。しかし行動に打って出ることをしないサラは受身の姿勢を克服することができない。そのためメルフォントへの依存はますます強まる。しかし彼は依然として遺産相続問題が片付くまではという口実で結婚を引き延ばす。このようなメルフォントとは如何なる人物であるのか。

### 3

メルフォントはサラの父親同様、下級の貴族と思われる。メルフォントの召使の言う、「このような連中との付き合いであなたは財産を浪費してしまいました。あの財産があればあなたはもっと名誉ある地位に就くことができたでしょうに」(第1幕第3場)という台詞から彼は経済的にも貧困だし、もちろんしかるべき地位に就いて活躍しているわけでもないことがわかる。有意義な活動もせず、無為な日々を過ごす彼のような貴族は生活に満足することもできないため内面的に荒む。そのため女性の愛に現状の閉塞状態からの脱出を求めようとする。しかし生活が有意義な活動によって充実していないため、その代償行為としての女性との関係も長続きのしない一時的なものに止まる。こうして永遠に満たされぬ愛の充足を求めてデモニッシュな衝動に駆られた彼は常に新たな愛を求めて相手の女性を次々と替え、その度に女性に愛の破局の責任を転嫁し、自分の行為の正当化を図る。マーウッドの言うように彼はまさに、「悪魔のようにか弱い人間どもを罪へと駆り立て、そして彼の仕業であるこの罪ゆえに後になって彼女たちを非難する」(第2幕第7場)のである。女性を誘惑し、罪を犯させ、もはや魅力を感じなくなるとたちまち捨ててしまう彼のこの行為は女性不信に際立っている。だから結婚などは彼には「一生、鎖に繋がれる」(第4幕第2場)こと、「惨めな名ばかりの自由さえも失う」(第4幕第2場)こと、愛が無くなっても結婚を解消できず「サラを永久に愛さなければならない」(第4幕第3場)こととして重苦しく耐え難いものに思われる。愛するサラに対しても彼のこの不安な気持ちは基本的には変わらず、それゆえ彼は結婚を躊躇せざるをえないのである。

このようにメルフォントの結婚嫌いは彼が有意義な活動に裏付けられた充実した生活を送っていないことに真の原因があるが、彼にはそれがわからない。彼はひたすら相手に責任を転嫁するばかりである。だから彼は自分の不実を正当化するために、悪いのは相手の墮落した娼婦のような性格にあるとして必要以上に相手の女性を侮辱する。彼がマーウッドを口汚く罵るのもこうした理由による。そのためついに彼女も怒り心頭に徹し、サラ殺しに到るのである。つまりメル

フォントの不実と侮辱がマーウッドによるサラ殺害を誘発したのであり、いわば彼が間接的にサラを殺したようなものである。

#### 4

さて、殺されるサラの罪であるが、秩序と道義と徳に反する行いをしただけの彼女の罪は少なくとも死に値するほどの大罪ではなく、むしろ容易に許されうるささいな罪といえよう。実際、今ではすでに彼女の父親はサラを許している。以前の彼は家父長制的な厳しい父親で娘の結婚も駆け落ちも許せなかったのであるが、しかし現在の彼は、「これ以上サラなしではいられない。サラは年を取った私の支えだ。もしサラが私の悲しい余生を楽しいものにしてくれるのであれば一体誰がそうしてくれよう。もしサラが私をまだ愛してくれているのならサラの犯した過ち (Fehler) は忘れよう」(第1幕第1場)とあるように、寂しさと秩序の板挟み・葛藤という内的分裂を経て完全に寂しさに負けた父親はサラを罰し続けるよりは寂しさの解消と破壊された家庭の再興の方を優先させ、サラを許すことが可能となるようにサラの犯した罪を「過ち」にすぎなかったとその罪一等を減じ、家父長制的秩序を放棄したのである。サラ宛の父親の手紙を読んだサラが、「父は私の駆け落ちを不在と表現している」(第3幕第3場)、「父は私がまだ父を愛しているだろうと自分を慰めている」(同上)、「父は性急すぎた厳格さを忘れるように、そしてもうこれ以上、不在によって罰しないようにと私にお願いしている」(同上)と言って、父親の変わりように驚くこともそのことを裏付けている。また召使に対して、「これからはもう私の召使とは思わないでくれ。(……)。私とお前の間の差別は全て撤廃だ」(第3幕第7場)という主人と下僕、貴族と平民という身分差を撤廃し、召使と平等になろうとの彼の申し出にもそれは認められる。家父長制的秩序や封建的身分制を否定しようとする彼のこの行為はむしろ自然に合った好ましい行為であり、愛に満ちたりべらるで新しい家庭の実現が暗示される。これは当然ハッピーエンドを予想させる。父親から許されたことでサラも駆け落ちした行為をただ「誤り (Irrtum)」とのみみなし、「神ももはや罪 (Verbrechen) とはみなしていない」(どちらも第4幕第8場)、とあるように「罪」とは考えない。またメルフォントも烈しい内的葛藤に陥りながらもサラとの結婚をもはや避けられないものとして覚悟する。これらのこともハッピーエンドの予感を裏付ける。

しかしそこへマーウッドの横槍が入る。マーウッド本人とは知らずに彼女に面会したサラは、父親から許されたこと、自分が再び幸せになるであろうことについて語る。同時にサラは、「自堕落な女を一度愛したからといって永久に愛さなければならないとしたら不幸なことですわ」(第4幕第8場)、「冷酷な娼婦 (Buhlerin)」(第4幕第8場)、などと言ってそれと知らずにマーウッドを侮辱する。それはサラの抱くマーウッド像が全てメルフォントからの一方的な歪んだものであることに起因する<sup>(8)</sup>。「冷酷な娼婦」というサラの発言も「淫らで利己的な浅ましい娼婦」(第2幕第7場)というメルフォントが以前に使ったことばをサラがはっきり記憶していたからだ



と思われる。しかしたとえそうであっても自分で確かめもせずにマーウッドの人格を否定する発言を平気で行って彼女を傷つけ、彼女の幸せになる権利と願いを一顧だにしないサラの振る舞いは余りに利己的・独善的で、到底許されえないものであろう。サラがメルフォントの愛人という点でマーウッドと自分が同類であることを認識し、彼女に理解と共感と同情を示した上でのハッピーエンドならマーウッドによって許されるかもしれないが、サラは未だそのレベルには達していない。それゆえマーウッドは高みに立っているサラから侮辱されたと受け取り、サラ殺害に及ぶ。このようにマーウッドによるサラの殺害には必然性が認められるのである。

しかしマーウッドは気がついていないが、実はサラは直接彼女に会うことにより、メルフォントによって歪められたマーウッド像とは違う別のマーウッドを知り、成長していた。気絶の後、意識を取り戻したサラがマーウッドに関して行う、「最後の無益な突撃を敢行して疲労困憊した敵には安心して撤退できるようにして差し上げましょう」(第5幕第4場)という発言や、「メルフォントさん、仮にまだほんのわずかでもあなたの愛に私が疑いを抱いていたとしても、半狂乱のマーウッドさんをみれば疑いは晴れますわ。彼女は私に一番大切なものを奪われたと確信したに違いありません。失ったことを確信していなければもっと慎重に振舞ったことでしょうから。」(第5幕第4場)という台詞がサラの成長を物語っている。これは自分がメルフォントをマーウッドから奪い取ったという自覚であり、ここには勝利したという感情と敗者への敬意が認められこそすれ、彼女に対する軽蔑的な感情はもはや影を潜め、それに代わってひとつ間違えば自分が彼女の立場に立ったかもしれないという思いと、彼女と自分は同類だという感情の芽生えが認められる。「とてもずるいことに人間は自分を切り離して、激情から自分とは違った人物を作り上げ、その人物に冷静な時にはとても是認できないことさえ押し付けるのね」(第5幕第5場)というサラの発言から、同類であることに目を瞑り、相手に全てを押し付けて自分は涼しい顔をする偽善性・ずるさを今、サラは自分に感じていることがわかる。

このようにサラはマーウッドに同情や哀れみすら感じており、彼女に対する軽蔑に凝り固まっていたそれ以前のサラに比べて明らかに成長が認められる。しかしそれにもかかわらずこの直後、毒を盛られたことがサラに伝えられ、彼女の死は避けられないこととなる。

## 5

一方、サラに毒を盛ったマーウッドについても考察しなければならない。良家の生まれで、若くして未亡人となった彼女は人を助けるために財産を使い果たし、その後10年以上メルフォントと愛人関係を続け、子供まで儲けたが、サラに乗り換えたメルフォントによって捨てられたのである。彼女の烈しい嫉妬は、彼女が彼を愛しながらも彼の結婚嫌いにより彼と結婚しなかったため、彼がサラに鞍替えすることを彼女が法的に阻止しえない、ことに由来する。「結婚しなくても大丈夫だと信じていたからあなたの愛情を受け入れる用意ができていました」(第2幕

第7場)。しかし結婚しなくても2人の愛情と関係はいつまでも続くという彼女の確信はいともたやすく裏切られてしまった。そのため彼女はサラの居場所をサラの父親に知らせて、彼が娘を連れ戻しに来るように画策する。また彼女はメルフォントの気を惹くために彼との間にできた子供のアラベラをも連れてきている。いざとなれば子供を出しに使おうというわけである。実際、子供は利用され、それが思うように功を奏さないと、彼女は自分の子供を殺害したメディアを真似て、子供を殺すとメルフォントを脅しさえする。「もしあなたがメディアよりももっと残酷な母親を知っているのなら、私はその倍も残酷な女であることをみせてあげるわ。毒と短剣で復讐するのよ。いえ、駄目、それらはあまりに慈悲深い道具！それではあなたと私の子供はすぐに死んでしまう。私は子供が死んだところをみたいのではなく、死んでいくところをみたいの！」(第2幕第7場)。「娘の霊が何度もため息をつきながら父親(＝メルフォント)の後を追う時には、父親はすでにあの世に行っていなければならないのよ」(第2幕第7場)。こう言って彼女はメルフォントを短剣で突こうとするが失敗する。すると彼女は、「私の口は娘に対して荒れ狂いましたが、心はやっぱり母親の心なのね。メルフォントさん、私が陥った狂気は忘れて下さい。そしてその弁解のために狂気の原因だけを考えて下さい。」(第2幕第8場)と言って神妙になる。もしマーウッドがメディアを真似しようとするのなら、彼女はあくまでメルフォントを殺さずに、ただ彼の目の前で自分たちの子供だけを殺して、その苦しみを彼に永遠に味わわせなければならない。彼を殺してしまえば子供を殺す意味はほとんど無くなるからである。このことから彼女の気持ちは単にメルフォントを脅すだけで、彼女には本当に子供を殺すつもりは無いことがわかる。子供は出しに使われているだけなのであり、彼女はメディアほど残酷な女性ではないことになる。

ではマーウッドの本質とは如何なるものであろうか。彼女はサラとは違ってメルフォントの愛を繋ぎとめるために特に結婚を要求しているわけではないし、ましてやサラのように神や美德との関係で結婚を必要不可欠と考えているわけでもない。マーウッドにとっては彼を再び取り戻すことが一番肝心なことである。つまり彼女はサラとは対照的に道徳秩序からの逸脱も、神に許されない未婚の同棲も意に介さないのである。彼女は自分の愛情と欲望の赴くままに行動できる女性なのである。その意味では彼女は性的に解放された進歩的な女性とも言えるし、男の不実に対しては愛を取り戻すためにはどんなことでも行うことのできるいわば闘う女性とも言えよう<sup>(9)</sup>。だから罪の意識も世間体も名誉も彼女には無縁なことである。一見このことに矛盾するようにみえる、「私はあなたのために私の名誉を危険に晒しました。純潔は名誉より大切なものではありません。」(第2幕第7場)というメルフォントに向かって言う彼女の台詞があるが、この台詞は、世間体や名誉の重視は男性の心を虜にする有力な武器になりうるという彼女の判断から口にされたものであって、決して彼女の信条ではなく、その場限りの出任せの嘘、とみるべきであろう。実際、メルフォントの心を虜にした後は、彼女がもはや必要無いと判断してそれらをかなぐり捨てていることも筆者のこの見方を裏付けていると思われる。このように世間体も名誉も心の中で無視し、外面にもそれが滲み出たマーウッドであるから、世間の美德や倫理が彼女を断罪するの

は当然である。サラのマーウッド批判はその典型例である。しかしこれはあくまで世間の目にとってはマーウッドが美德や倫理に反すると映るだけであって、彼女が本当に骨の髄まで堕落した女性であるか否かとは無関係である。実際、マーウッドはサラの批判に対して猛烈に反論するが、これはマーウッドが自分では堕落したとは思っていないことを示している。まさに彼女は世間の偏見・不当な評価を相手に闘う女性なのである。

このようにマーウッド像をみてくると、冒頭で紹介した悪徳の権化・稀代の悪女というマーウッドの評価はあまりにも単純で一面的すぎて不適切と言わざるをえない。むしろ既存秩序に囚われない解放された女性、世間の偏見や男の不実に対して闘う女性、という進歩的・肯定的な面が彼女の本質的な部分であるというべきであろう。それにもかかわらず彼女の企ては全て失敗する。メルフォントによる数々の侮辱と、おまけに面会でのサラによるあまりにもひどい侮辱から堪忍袋の緒が切れた彼女はついにその侮辱に対する復讐のためサラを殺し、さらに捨てられた女の恨みをサラ殺害によってメルフォントにも思い知らせようとする。「復讐と怒りが私を人殺しにしました」(第5幕第10場)。こうしてマーウッドはサラに毒を盛る。

以上のことから、冒頭で紹介したハッピーエンドとサラの突然の死による悲劇という筋の分裂の問題は、メルフォントの不実とサラによる侮辱がマーウッドをサラ殺害に追い込む結果になっており、この流れには必然性のあることがわかる。そうである以上、筋が分裂してまとまりが無いという説はその根拠を喪失する。メルフォントとサラは自分たちの行動の当然の帰結として自ら墓穴を掘るのである。そもそもマーウッドを犠牲にしたハッピーエンドなどはないのである。

## 6

ではサラはどうすべきであるのか。先にも述べたとおり客観的にはサラの罪は大した罪ではないので、彼女は自分の罪は死ぬほどの罪ではないと考えるべきである。つまり彼女は、自分の死は神の罰によるもの、とは考えるべきではないし、同様に、マーウッドが神に代わって自分を罰したから彼女を許さねばならない、などとも考えるべきではない。そうではなくサラはマーウッドと自分を同類とみ、場合によっては自分が彼女の立場に立たされて同じことをしたかもしれないとして、彼女に対する同情や哀れみの気持ちから彼女を許すべきなのである。

しかしサラはそうは考えない。「私は死にますが、彼女を許します。神は彼女を介して私に罰を与えたのですもの。」(第5幕第10場)と言っているように、サラはマーウッドを介して神から死を賜り、神のもとへ召されると考える。サラは毒殺が贖罪にあたると考え、彼女に感謝さえしている。サラは神依存を依然として一歩も脱してはいないのである。「神の摂理に逆らうことはできません」(第5幕第10場)。このように信じるサラは心の中では神と和解して死ぬ。「サラはもはや現世の存在ではない。半ばもう天使のようだ。天国からのあらゆる祝福が降り注いでいる娘の霊に女々しい父親の祝福など何の意味もない。」(第5幕第10場)と述べる父親の台詞もサラ



が完全に既存秩序に戻ったことを裏付けている。しかしサラのこの姿勢は敗北主義に他ならないであろう。なぜなら、毒を盛られた恨みを忘れ、無私の気持ちからのサラの許しは一見すると美德の極みであり魂の浄化のようにみえるが、実際にはそうではなく、神との関わりゆえの許し、すなわち許せ!というのが神の意思とみてそれに従うことであって、その点ではこの許しは主体的・自主的なものでもなければ魂の浄化でもないからである。父親はそれゆえサラの発言を誤解している。彼はサラの言動を神から切り離し、自発的なものとみているからである。彼はサラを過大評価しすぎていると言わざるをえない。「半ばもう天使のようだ」は明らかに言いすぎである。

サラは、自分がマーウッドに殺されるそもそもの原因はメルフォントの結婚嫌いという不実にある、と考えるべきである。死に臨んで弱気になったとはいえ、死ぬほどの罪を犯したわけでもない自分が死ぬ羽目に陥ったのは彼の不実がマーウッドに自分の殺害を行かせたのだとして、サラは断固メルフォントを糾弾すべきであって、決して彼を許すべきではない。実際、メルフォントはそうされるのが当然だと自分の非を悟っている。「サラの殺害者は誰だ。マーウッドよりはむしろこの私ではないのか」(第5幕第10場)。瀕死のサラに罵られ、サラの父親からも非難されればメルフォントは不実を懺悔してサラ家を去り、ひとり罪を償う生き方を選ぶことが可能だし、恐らくそうしたであろうと推測される。しかし罪の償いに生きる道はサラによる許しと父親による息子としての受け入れによって彼には閉ざされる。彼らの寛大な許し、特に「この聖女は人間の力にあまることを命じたのです」(第5幕第10場)とメルフォントに言わしめるサラの最期の言動はメルフォントの自責の念をかえって強め、彼に自分の惨めさと人でなしを痛感させ、彼を打ちのめす。そのため結果的に彼は死に追いやられることとなる。彼らにそのつもりがなくても彼らの言動はある意味では彼に対する非常に残酷な仕打ちとなっているのである。結局、彼は罪の償いに生きる辛く長い道ではなく、自害によって息子に値する人間となる安易な道の方を選ぶ。

メルフォントの自害によりサラの父親の新たな家庭の再興の可能性も失われてしまったかにみえる。しかし父親は娘の遺言からアラベラを養女にする。このことからサラとの約束を守ろうとする父親の決心が本物であることがわかる。こうして彼はかろうじて家庭を維持することができる。さらにアラベラを養女にしておけば、将来、彼女に養子を迎えて家を再興することが可能となる。それも封建的・家父長制的な家庭ではなく、サラの父親の現在の意向が強く反映したもっと平等でリベラルな新しい家庭が可能となる。かくしてサラとメルフォントに代表される封建的な残滓が一掃され、封建主義を超えるサラの父親の新たな家庭の誕生が暗示されて作品は終わる。

## 7

以上の考察から、サラの成長に関してはマーウッドに対する彼女の態度の変化から確かに一定程度の成長は認められるものの、家父長制に逆らい、夫を自分で選ぶという進歩的な面があるに

もかわらず、神依存・自立の欠如などの点で基本的には封建的な立場は一步も乗り越えられてはおらず、積極的に評価できるような成長は認められないと言わざるをえない。またマーウッドについては殺害行為は決して許されるものではないが、その言動には同情すべき余地が多分にあり、何よりも既存秩序から自立し、世間の偏見と男の不実に対して闘う進歩的な女性という面は肯定的に評価されるべきものである。むしろメルフォントこそその不実により皆を不幸にする悪の張本人とみなすべきであろう。しかし本論文で明らかになった、サラを否定的に、マーウッドを肯定的に、そしてメルフォントを災いの根源とする作品解釈の結論は、「悲劇が観客の中に呼び起こす唯一の情熱は同情だと思う」<sup>(10)</sup>、「我々を同情できる人間にする者はまた我々をより善良な、より有徳の人間にもするのだ」<sup>(11)</sup>、というレッシングの書簡にみられるように、作品によって読者・観客の同情を呼び起こして啓蒙する、という啓蒙主義者レッシングの創作の意図とは相当ずれたものとなっている。

それはレッシングの啓蒙的意図にもかかわらず彼が無意識にそれを乗り越えて、より深い人間性の本質を描き出してしまったことによる。この作品は作者にとっては決して納得のいくものではなかったし、当時の観客にとっても最初こそ好評を博したもののじきに反響を呼ばなくなった。このこともこの作品が、感傷主義の時代の流行に迎合したお涙頂戴的な作品ではなく、観客とその作者にすら気づかれることのなかったもっと深いところに価値のある作品であることが理解されなかったことを物語っている。家父長制を乗り越える理想的な家庭の出現を予感させる点では啓蒙的意図が功を奏しているとはいえ、この作品の比重はそれよりは明らかに人間性の描写の方に置かれている。人間性の真理を描いたことではこの作品は啓蒙主義の作品というよりはむしろシュトルム・ウント・ドラングの先駆と位置づけるべきものであろう。レッシングのこの作品を通して合理主義といわれる啓蒙主義と非合理主義といわれるシュトルム・ウント・ドラングの連続性が指摘されうるのである。文学史のこの2つの文学潮流についても両者の関係と評価について再検討が必要だと思われる。

注

テキストはGotthold Ephraim Lessing: Gesammelte Werke in 10 Bänden. 2. Aufl. Berlin u. Weimar (Aufbau) 1968, Bd.2: Miss Sara Sampson. Ein bürgerliches Trauerspiel in fünf Aufzügen.を使用。引用の後、幕と場を( )内に示す。

- (1) Eibl, Karl: Gotthold Ephraim Lessing. Miss Sara Sampson. Ein bürgerliches Trauerspiel. (Commentatio. 2.). Frankfurt a. M. (Athenäum) 1971, S.150.
- (2) Hettner, Hermann: Geschichte der deutschen Literatur im achtzehnten Jahrhundert. Berlin (Aufbau) 1961, Bd. I, S.697.
- (3) Durzak, Manfred: Äußere und innere Handlung in „Miß Sara Sampson“. Zur ästhetischen Geschlossenheit von Lessings Trauerspiel. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte 44 (1970) S.62.
- (4) Barner, Wilfried [u. a.]: Lessing. Epoche-Werk-Wirkung. Hrsg. von Wilfried Barner und Guter Grimm. Unter Mitw. von Volker Badstübner, Rolf Kellner und Ursula Nowak. München (C.H. Beck) 1975, S.145.
- (5) Mann, Otto: Lessing. Sein und Leistung. 2. Aufl. Hamburg 1961, S.233.
- (6) Janz, Rolf-Peter: „Sie ist die Schande ihres Geschlechts“. Die Figur der femme fatale bei Lessing. In: Jahrbuch der Deutschen Schiller-Gesellschaft 23 (1979) S.214.
- (7) 今井 宏 編「世界歴史大系 イギリス史2 ―近世―」(山川出版) 1990年、123頁及び364頁参照。
- (8) M. Durzakも「マールウッドの描写は全てメルフォントの視点からなされており、それゆえ決して彼女の客観的な姿として受け取ることはできない」と述べている。a. a. O., S.53.
- (9) この点で筆者は先に注5と注6で引用したO. MannやJanz, R.-P.の説に賛成である。
- (10) Lessings Brief an Friedrich Nicolai. Im Nov. 1756. In: Gotthold Ephraim Lessing: Gesammelte Werke in 10 Bänden. 2. Aufl. Berlin u. Weimar (Aufbau) 1968, Bd.9, S 76.
- (11) ibid., S.78.

**Resümee**

## Die Emanzipation der Frauen in Lessings „Miss Sara Sampson“

Sumio SHIMIZU

Zusammen mit Mellefont ergreift Sara die Flucht vor ihrem patriarchalisch und feudalistisch denkenden Vater, der davon überzeugt ist, dass er als Vater über den Ehemann seiner Tochter zu bestimmen habe. Sara legt dagegen größeren Wert auf die Liebe als auf die Konvention. Darin geben sich ihre selbständige Haltung und Tatkraft zu erkennen, die ihre positive Seite darstellen.

Andererseits hat sie aber auch ein sittliches Schuldgefühl gegenüber Gott. Dieses Gefühl und ihre Gewissensbisse glaubt Sara nur durch die Heirat mit Mellefont besänftigen zu können, denn das uneheleiche Zusammenleben mit ihm scheint ihr nichts anderes als ein lasterhaftes Leben zu sein. Dass die Marwood sie vergiftet, hält sie deshalb für die Strafe Gottes. Im Sterben vergibt sie aber nicht nur der Marwood, sondern sie bittet auch ihren Vater, deren Kind anzunehmen. Ihr Vater erkennt in ihrem Mitleid mit der Marwood die Läuterung ihrer Seele und sagt, dass sie „halb ein Engel“ sei. In Saras Vergebung sieht er zwar ihre geistige Reifung, aber sie vergibt auch dem perfiden, eigentlich am heftigsten zu tadelnden Mellefont. Das alles zeigt, dass Sara sich doch noch innerhalb der Schranken der feudalistischen Ordnung bewegt. Sie macht ihr Verhalten noch immer von Gott abhängig und ist nicht selbständig genug. Sie vermag es nicht, mit der alten Tradition entscheidend zu brechen. Das Urteil ihres Vaters ist deshalb zu positiv und nicht zutreffend. Ein Wachstum ist bei ihr nicht zu erkennen.

Im Gegensatz zu Sara ist die als „wollüstige Buhlerin“ bezeichnete Marwood weitaus selbständiger, weil sie über die feudalistischen Ordnungs- und Sittlichkeitsanschauungen erhaben ist. Sie ist eine emanzipierte Frau, die die Untreue der Männer bekämpft und alles zu tun bereit ist, sich ihre Liebe zurückzuerobern. Sie ist eine moderne Frau. Aber die Leute fürchten sich vor einer solchen Frau und schließen sie als schlechten Menschen aus der Gesellschaft aus. Ihr Giftmord an Sara ist natürlich nicht zu vergeben. Aber Mellefont, der die Ursache für den Mord darstellt, ist viel schuldiger als sie.

Saras Vater hatte in seiner Vereinsamung seine patriarchalischen Ansprüche zurückgestellt und war gewillt gewesen, seiner Tochter zu vergeben. Nun legt er seine Rolle als dominierende Autorität ganz ab. Nach Saras Willen will er das Kind annehmen und eine neue Familie begründen. Man kann erwarten, dass sich in seinem Haus die Idee der Humanität voll und ganz verwirklichen wird.

Gewiss verband Lessing mit dem Stück eine moralische Zielsetzung, doch ungehindert von dieser Absicht bringt es die nackte Wahrheit der Menschen an den Tag. Das Stück ist aus diesem Grund weniger im Rahmen der Aufklärung als in dem des Sturm und Drangs zu sehen. Es zeigt nicht den Bruch, sondern die geistige Kontinuität im Übergang der beiden Strömungen.